

Contents *****

特集：2021年自民党総裁選へのオタク的展望	1p
<今週の”The Economist”誌から>	
“September surprise” 「セプテンバー・サプライズ」	7p
<From the Editor> 自民党総裁選トリビア	8p

特集：2021年自民党総裁選へのオタク的展望

本日9月17日は、自民党総裁選挙の公示日です。岸田文雄前政調会長、高市早苗前総務相、河野太郎行革担当相の3候補に加え、昨日になって野田聖子幹事長代行の出馬が発表されました。9月3日に菅義偉首相が事実上の退陣宣言をしてから2週間、こんな風に政局が活発に動いているのを見るのは、実に久しぶりの気がします。

この間に株価も上昇して、日経平均は3万円台を回復し、今週はとうとう31年ぶりの高値を付けました。「新政権による政策待望」が理由と言われますが、もっと大きな期待があるのではないかと思います。長い歴史を持つ自民党総裁選挙は、2021年の日本政治に何をもたらすのか。オタク心をいっぱいにして、総裁選を語ってみたいと思います。

●「現職が辞めた後の総裁選」は盛り上がる

筆者が小学生6年生のときに「三角大福の争い」があった。長期政権を担った佐藤栄作首相が退陣した後に、三木武夫、田中角栄、大平正芳、福田赳夫という個性豊かな4人の派閥の長が出馬した。子ども心にも「政治って面白い！」と感じたものである。思えば政治オタクになった原点は、この1972年の戦いにあったのかもしれない。

自民党総裁選は、「公職選挙法」などに縛られない世界である。現金が乱れ飛び、2つの陣営からもらうと「ニッカ」、3つの陣営だと「サントリー」、4つ陣営すべてからもらった「オールダー」というツワモノも居た、などという「伝説」がある。このときの戦いがあまりに激しかったために、後に黨員投票という制度が導入されることになる。

この戦いを制した田中首相は、2か月後の9月には盟友の大平外相とともに北京に飛び、日中国交正常化を成し遂げている。来年はそれから50周年となるが、対中政策の転換は、自民党総裁選挙において三木派を味方につけるための条件であったという。こんな風にして、自民党総裁選挙は過去に何度も政策の転換点となってきた。

総じて自民党総裁選は、現職に新人が挑戦する年はあまり盛り上がらない。逆に現職が退陣した後の争いは面白い。多くの候補者が出馬して、政策論議を行うことになるが、その結果、勝利した総裁は強力な政治基盤を手に入れるとともに、みずからの政策の実現をミッションとすることになる。総裁選挙が政策の転換点となったケースとしては、以下の3つが印象に残るところである。

(1) 1998年の総裁選：橋本龍太郎首相が参院選大敗の責任を取って退陣し、小渕恵三、梶山静六、小泉純一郎の3人が争った。世に言う「凡人、軍人、変人」の戦いである。

このときの日本経済は、金融不安問題の最中であつた。大手銀行の不良債権処理をどう進めるかについて、梶山氏は「ハードランディング」を、小渕氏は「ソフトランディング」を主張した。結果は小渕氏の勝利で、その後は財政出動、金融緩和など「何でもあり」の大盤振る舞いの経済政策となる。「オプチノミクス」によって株価は上昇したが、金融問題の解決にはさらに時間を要することとなる。

(2) 2001年の総裁選：不人気な森喜朗首相が辞任表明した後に、麻生太郎、橋本龍太郎、亀井静香、小泉純一郎の4氏による後継争いとなった。当初は橋本氏の優勢が伝えられていたが、黨員票の圧倒的な支持を得た小泉氏が当選することとなる。

この時も日本経済は不況のどん底にあつたが、橋本氏が主張した大規模な景気対策は否定され、小泉首相による「聖域なき構造改革」路線が定着することとなる。

(3) 2012年の総裁選：自民党が野党だった時代だが、谷垣禎一総裁が再選を辞退。安倍晋三、石破茂、石原伸晃、町村信孝、林芳正の5人が争った。1回目の投票では石破氏が首位となったが、決選投票において2位3位連合が成立して、安倍氏の逆転勝利となった。

この論戦の間に、「日本銀行に大胆な金融緩和を求め、デフレ脱却を最優先する」という安倍氏の主張が広く浸透し、市場では円安・株高が進行した。そして3か月後の解散・総選挙では、第2次安倍内閣が発足することとなる。

上記3つの総裁選は、いずれも「ミッションを持った強い総裁」を生み出している。小泉首相、安倍首相は長期政権化したし、小渕首相も脳梗塞に倒れていなければ、本格政権となったのではないだろうか。そして株式市場にとっては、これらの総裁選は絶好の「買い場」を提供していたといえる。

2021年の総裁選もまた、そうなる可能性を秘めている。安倍首相の突然の退陣を受けた昨年の総裁選は、まだそこまでの準備が整ってはいなかった。しかし今回の場合、3期9年にわたる「安倍・菅政権」の後を受けて実施される。これから2週間の選挙期間の後で、新総裁はフレッシュスタートを切れるのではないか。今月に入ってから株式市場で高値が続いていることは、けっして異とするには当たらないと思うのである。

●時代につれて変転する総裁選

ということで自民党総裁選挙は、わが国における政策決定プロセスにおける重要な場として過去に何度も機能してきた。

これに対し、一政党の内部でそういう意思決定が行われるのは望ましくない、国家の政策変更は政権交代を通してオープンに行うべきだ、という「筋論」もあり得よう。そもそも自民党総裁選は派閥同士の戦いであって、外部から見た透明性も低い。民主主義の手続きとしては、よく言ってもセカンドベスト的な存在であろう。ただし半世紀以上の風雪に耐えてきたシステムであり、政権交代に伴うコストが多大であることを考えれば、「まだ使えるメカニズム」と見るのが現実的であろう。

かつての自民党の派閥は、議員のカネと選挙とポストの面倒を見てくれる強力なシステムであった。各派閥は領袖を総裁にするために結束し、その派閥の合従連衡によって総裁が決まる。そしてそのことが、自民党の金権体質の温床となっていた。

かくてはならじ、ということで90年代には小選挙区制が導入された。党執行部の権限が強化され、確かに派閥の力は弱まった。現在では、派閥は「政策集団」であるという建て前になっている。派閥は新人議員の発掘や、その後の育成を担当し、政務官や副大臣ポストの配分は、今も派閥の影響下にあると言われている。

昨年誕生した菅義偉総裁は、自民党の歴史始まって以来初の「無派閥の総裁」であった。それは一見いいことのように思われたけれども、菅氏が支持率低下で困り果てたときに、親身になってくれる人が周囲に居なかった。最後はいちばん支えてくれた二階幹事長を外そうとしたら、本当に孤立してしまい、総裁選出馬を断念せざるを得なかった。

こうしてみると、「派閥＝悪」と考えるのは行き過ぎであろう。大きな組織に派閥ができるのは自然なことであるし、その方が相互チェックが働くので、早期に不祥事を発見することもできる。組織にとって、いちばん拙いのは総主流派体制で、できれば「反主流派」が存在する方がいい。いざというときの「受け皿」にもなり得るからである。

さらに皮肉なことに、現在の自民党内で派閥としてもっとも結束しているのは、かつて「お公家さん集団」と呼ばれていた宏池会である。ここだけは、岸田文雄氏という領袖が総裁候補者となっている。しかも今年の総裁選では、岸田氏が敗れたために派閥全体が「冷や飯」を食わされた。逆にそれ以外の派閥は、支持を一本化できていない。今回の自民党総裁選挙は、案外と「派閥の有難み」を再確認する機会となるのかもしれない。

加えて面白いのが、若手議員の動きである。9月10日夜、当選回数1回から3回までの議員が「党風一新の会」（代表世話人：福田達夫氏）を結成した。90人が参加予定とのことだが、それがリモート会議であったという点が今風である。コロナ下の総裁選は、リアルで会うことなく、リモート会議やSNSでやり取りすることが多くなる。ところがベテラン議員たちは、リアルに会って「ここだけの話」をすることが習性となっている。自民党内の世代間ギャップが窺い知れるようで、まことに興味深い動きである。

今回の自民党総裁選挙は、通常に比べると候補者の出足が遅い。9月3日に菅首相の不出馬発言があってから、河野氏の出馬表明が9月10日、石破氏の不出馬表明が9月15日、野田氏の出馬に至っては何と告示日前日の16日である。おそらく「簡単には人に会えない」という条件が、各陣営の足取りを遅くしているのであろう。

他方、リモート会議やSNSが重要性を増すのも間違いないところだ。今回の総裁選挙においては、「評判を呼んだZoomのメッセージ」や「不用意なツイートによる炎上」が候補者の明暗を分けるかもしれない。

●総裁候補4人の政策を比較検討してみる

かくして告示日の朝になって、4人の候補者が並ぶこととなった。この顔ぶれを見るだけでも、自民党の様変わりを感じるころである。

なにしろ 4人の候補者のうち2人が女性である。「見た目」が持つ意味はけっして小さくはない。今年は東京五輪組織委員会における森会長の辞任など、ジェンダーを意識する機会が多かった。これもまた時代を反映した総裁選の変化のひとつであろう。

あらためて4候補者の政策的な位置づけを、以下のようにまとめてみた。

○4候補者のポジショニング

	外交・安保	経済政策	社会政策
高市早苗 (60)	タカ派	サナエノミクス	安倍路線の継承
岸田文雄 (64)	現実派 (元外相)	分配重視	センターレフト
河野太郎 (58)	現実派 (元外相・防衛相)	分配重視	センターレフト
野田聖子 (61)	ハト派?	弱者重視の保守政治	リベラル

大雑把に「右と左」「タカとハト」に分けると、4候補は「1対3」に分かれる。特に社会政策を論じた場合には、ずいぶん「自民党らしくない」感じがするだろう。経済政策についても、明確にアベノミクスを継承する高市氏と、それ以外の3氏ではややトーンが違うものになりそうだ。

ただし外交・安保問題を論じた場合、外相経験者が2人いることもあり、4人の間に大きな違いはなさそうである。今週のThe Economist誌が指摘しているように、「日米同盟基軸」「対中防衛強化」などの基本線は揺るがないだろう (P7の抄訳を参照)。

また、岸田氏と河野氏の考え方は比較的近いことが分かる。前者は宏池会、後者は志公会で、同じ派閥から分かれている。ただし政治スタイルや気質はかなり違うようだ。

2000年以降、総理総裁を務めた自民党政治家は森喜朗、小泉純一郎、福田康夫、安倍晋三と、ほとんどが「清和会」所属の議員であった。今回、岸田氏か河野氏が総裁になった場合は、約20年ぶりに党内のセンターレフトにボールが回ることになる。これが自民党の「振り子の論理」だとしたら、味わい深い話である。

さて、これは米大統領選挙の場合にもよくある話だが、候補者が最初に用意する政策ペーパーはさほど重要ではない。注目すべきは、これから 2 週間かけて行われる政策論争である。世論の反応を見ながら、どんなテーマが関心を集め、政策課題として浮上するか。**「次期総裁がどんなミッションを得るか」は、終わってみなければ分からない**のである。

以下、9月17日朝のBSテレ東『日経モーニングプラス FT』に筆者が出演した際に、豊嶋広解説委員との掛け合いから浮上した論点をご紹介します。これらはほんの序の口、であってほしいものである。

- * **コロナ対策**：岸田氏の「野戦病院」などのアイデアは良いが、肝心なのは病床の確保よりも人員の手当て。高市氏の「ロックダウン法制」は望ましいことだが、時間をかけて立法したものの、「なかなか抜けない伝家の宝刀」になってしまう可能性が大。どこまで深追いするかは悩ましいところ。
- * **財政出動**：岸田氏が当初から「数十兆円」と言い方をしているのが気になっている。事前に財務省と打ち合わせているのではないか。前年度予算の使い残しもあるので、それほど拡張志向ではないのかもしれない。高市氏が「物価上昇2%達成まで、財政収支黒字化目標を凍結」としているのは、まさに MMT 理論そのもの。大丈夫だろうか。これに対し河野氏は「ワイズスペンディング」とやや控えめな態度。
- * **分配重視**：岸田氏、河野氏ともに「中間層への分配」を重視している。これは世界的な潮流ではあるのだが、具体的にどうやってやるかと言えば難しい。単に税制を使う（賃上げした企業に減税する）だけでは実現できないのではないか。子育て世代への配分を厚くするなど、きめ細かな対応が必要となるだろう。
- * **社会保障制度**：河野氏が、「年金の最低保障部分の財源に消費税を」と提案している。長年、「負担と給付の明確化」を言い続けてきた河野氏らしいが、これに対する世論の反応が興味深い。「老後 2000 万円問題」などで国民の意識が変わってきている可能性があるし、消費税増税につながる提案は受け入れられないような気がする。
- * **カーボン・ニュートラル**：次期首相は早速、10 月末にはローマの G20、グラスゴウの COP26 に出席しなければならない。それらの場では、日本の利益を主張してもらわねばならず、菅首相との引継ぎをしっかりとっていただきたい。
- * **日銀の金融政策**：次の総理総裁は、2023 年春に次の日銀総裁を指名する公算が高い。黒田緩和の 8 年半は、ある程度の成果は上げたとはいえ、「金融政策だけでは物価目標 2%を達成できない」ことも明らかになった。次の金融政策はどうあるべきか、という議論も総裁選においては必要ではないか。
- * **選択的夫婦別姓**：コロナ下の緊急課題とは言えないけれども、野田氏が候補者に滑り込んだことを考えると、案外こうした社会問題が世論の注目を集めることも考えられる。この 1 年で、ジェンダーを巡る意識の変容はかなり進んだ。夫婦別姓が実現すれば、対外的にも「日本が変わる！」というわかりやすいメッセージとなるだろう。

●ポスト菅政権を取り巻く今後の政治日程

最後に今後の政治日程についてまとめておこう。

まず9月29日に新総裁が誕生し、新たな党三役などの人事を決定する。そして翌週10月4日に召集される臨時国会で首班指名を受け、第100代内閣総理大臣に就任する。さらに組閣、新内閣発足と続くが、そのまま衆議院を解散して総選挙、とはいかないだろう。

おそらくは所信表明演説を行い、各党代表質問を行い、衆参で予算委員会も行って、「どういう内閣であるか」を明らかにした上で、総選挙に臨むことになるだろう。さらに10月末に重要外交日程があることを考えると、「10月中旬に解散、11月下旬に総選挙」となるのではないかと。以下は六曜を重視した解散日程（予想）である。ご参考まで。

9月

自民党総裁選告示 (9/17)
9月の時事通信世論調査 (9/17)
ロシア下院議員選挙 (9/19)
日銀金融政策決定会合 (9/21-22)
米FOMC (9/21-22)
第76回国連総会始まる (ニューヨーク、9/21~27)
菅首相が訪米→対面の日米豪印QUAD会合 (9/24)
ドイツ連邦議会選挙 (9/26) →メルケル首相が政界を引退
自民党総裁選挙投開票 (9/29) →新総裁誕生
自民党役員の任期満了→**幹事長など党新三役指名** (9/30)
緊急事態宣言、まん延防止措置の期限 (9/30)

10月

ドバイ万博が開幕 (10/1~翌年/3/31)
臨時国会召集 (10/4) →**首班指名選挙、組閣、新内閣発足**
所信表明演説 (10/7) →**代表質問 (衆参2日ずつ) + 予算委員会 (3日)**
9月の米雇用統計 (10/8) →失業保険上乗せ金失効後の失業率は？
世銀IMF年次総会 (ワシントン、10/15-17) →出席する財務大臣は誰？
G20財務相・中央銀行総裁会議 (10/15-16)
→**解散 (10/20) 大安？**
衆議院議員の任期満了 (10/21)
参議院補欠選挙 (10/24) →静岡選挙区と山口選挙区
G20サミット (ローマ、10/30-31) →前後に**米中首脳会談**も

11月

COP26 (グラスゴー、10/31~11/10)
FOMC (11/2-3) →テーパリングを決定？
APEC閣僚会議・首脳会議 (NZ、11/8の週) →オンライン開催
→**衆院選公示 (11/9) 友引**
中国で「独身の日」バーゲンセール (11/11)
→**総選挙 (11/21) 友引**

12月

新語・流行語大賞 (12/1)
→**特別国会召集 (12/6)**
真珠湾攻撃から80年 (12/7)
FOMC (12/14-15) →テーパリング開始？
ソ連邦崩壊から30年 (12/25)

<今週の”The Economist”誌から>

”September surprise”

「セプテンバーサプライズ」

Asia

September 11th 2021

***これだけの政局を目撃するのは久しぶりです。そこで気になるのは、”The Economist”誌がこれをどう見ているか。「確実なのは不確実な時代に突入することだけ」とのこと。**

<抄訳>

菅義偉首相は9月2日までは再選を目指していた。ところがその翌日、自民党の役員人事の会合に現れたときには、うなだれていた。支持率が急低下し、党内支援が空洞化していることで、彼は結局、総裁選に出馬しないことを宣言した。菅氏の行動は、自民党と日本の政治情勢を流動的なものにした。9月29日には党は新しい総裁を選出する。勝利者は次期総理となり、11月下旬までに行わねばならない衆議院選挙で党を導くことになる。

これまでのところ4人の候補者がいる。元外相の岸田文雄は党内で良好な関係を築いているが、大衆的な支持には欠ける。元外相・防衛相で現ワクチン担当相の河野太郎は、SNSの達人で58歳と（日本の基準では）若い。大衆的人気はあるが、党内では変人と見なされている。元総務相の高市早苗は知名度は低いが、党内右派の受けが良い。元防衛相の石破茂も出馬の可能性がある。これまた一般の支持はあるが、仲間内では浮いている。

4人全員が政策上の急進的変化を意味しない。全員が米国との同盟関係を支持しており、中国の拡大志向に直面して日本自身が防衛を強化することを是としている。日銀の金融緩和を覆し、緊縮財政を目指すこともしない。対中関係をどうするか、景気刺激策をどう弱めるか、エネルギー政策やコロナ対策などについて、若干の違いがあるだけだ。主な分断線は、世代や表現様式にある。予測可能だが旧来の党人である岸田氏か、独立心旺盛でカリスマのある河野氏か、それともナショナリスト・ブランドの高市氏か。

世論調査では河野氏が先行する。しかし自民党総裁選を決するのは国民ではない。党に所属する383人の議員と、110万人の党員を反映した同数の党員票だ。過半数を得る候補者が居なければ（そうなることが多い）、より議員票に左右される決選投票に向かう。派閥ごとに投票することが多いが、最近の若手議員は派閥幹部の指示を受けない。

レースの結果は密室の協議や派閥間の裏取引に依存しがちだが、総選挙をめぐる思惑や河野氏を望む若手議員の影響にもよる。党の幹部たちは岸田氏の方が安全だと考えそう。靖国参拝の常連である高市氏は右派に魅力的だ。石破氏は、総裁選に参加することでも誰かを支持することでも、影響を与えることができるだろう。

菅氏の前任者、安倍晋三の8年間の長期政権の前には、日本は6年間で6人の首相が入れ替わった。菅氏の退陣とともに、同様な混乱が生じるかもしれない。ただしそれは新たな時代のドアを開けることも意味しよう。現時点で言えることは、菅氏の辞任によって不確実性が増したことだけが、確実だということである。

<From the Editor> 自民党総裁選トリビア

本日、告示された自民党総裁選に出馬した各候補に関するトリビアです。

●岸田文雄氏

宏池会出身 5 人目（池田勇人、大平正芳、鈴木善幸、宮澤喜一）
早稲田大学出身 8 人目（石橋湛山、竹下登、海部俊樹、河野洋平、小渕恵三、森喜朗、福田康夫）
広島県選出 3 人目（池田勇人、宮澤喜一）
銀行マン（長銀）出身では初、小選挙区で「1 区」選出では初、開成高校出身では初

●河野太郎氏

慶応大学出身 3 人目（橋本龍太郎、小泉純一郎）
党 3 役未経験者では宇野宗佑、小泉純一郎以来 3 人目（初代の鳩山一郎、2 代目の石橋湛山を除く）
神奈川県選出 4 人目（河野洋平、小泉純一郎、菅義偉）
50 代での総裁就任 8 人目（安倍晋三 53 歳、小泉純一郎 59 歳、河野洋平 56 歳、橋本龍太郎 58 歳、海部俊樹 58 歳、田中角栄 54 歳、岸信介 59 歳）

●高市早苗氏

女性で初
奈良県選出者で初
神戸大学出身で初（宇野宗佑が神戸商大中退）
松下政経塾出身者で初（総理には野田佳彦あり）

●野田聖子氏

女性で初
岐阜県選出者では初。
上智大学出身 2 人目（細川護熙）

以下は上記に対する若干の感想など。

(1) 自民党総裁の早慶戦は早稲田が圧勝なんですね。首相にはならなかった河野洋平さんを含む数字ですが、それでも 7 対 2 とは驚きです。

(2) 広島県と神奈川県は過去に自民党総裁がいっぱい出ている。山口県も有名ですが、戦後に限ると岸、佐藤、安倍の 3 人だけ。1 位は群馬県で、福田（赳）、中曽根、小渕、福田（康）の 4 人。奈良県や岐阜県など、まだ総理を出していない県は 18 もあります。

(3) 銀行員出身の総裁がゼロ、とはこれまた意外。そういえば商社マン出身者もゼロですね。林芳正さん（三井物産）と茂木敏充さん（丸紅）と福田達夫さん（三菱商事）と、たぶんこの中から誰かがなってくれるでしょう。菅原一秀くん（双日）は？ うーむ。

(4) 開成高校出身者がいままでゼロ、も意外です。麻布高校は橋龍さんと福田（康）が有名ですね。それ以外では、高崎高校から福田赳夫と中曽根康弘、山口高校から岸信介と佐藤栄作、それから学習院高等科も麻生太郎と細川護熙と 2 人ずつ輩出しています。

(5) 若い、若いと言われていた河野太郎さんも既に 58 歳。自民党総裁になるにはもう若くはありません。お父さん（洋平さん）が総裁になったのは 56 歳のとき。安倍さんは若くしてなりましたが、それも田中角栄と 1 つしか違わなかった。これも驚きです。

(6) 高市さんは政調会長、野田さんは総務会長の経験者。河野さんだけ党三役の経験がありません。確かに突破力の河野さんは、党務向きではない気がします。この戦いで 2 位になった場合は、いかにも次期幹事長が回ってきそう。これもキャリアパスでしょうか？

(7) 自民党総裁選に女性候補者が 2 人。そのこと自体に世の中の変化を感じます。先日、参議院政策担当秘書研修の講師を務める機会があったのですが、受講者の過半数が女性で、質疑も活発でした。日本の政治もちょっとずつ変わりつつあるように感じています。

いやはや、見ているだけで楽しい 2 週間になりそうです。

* 次号は 10 月 1 日（金）にお送りします。

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記あてにお願いします。

〒100-8691 東京都千代田区内幸町 2-1-1 飯野ビル <http://www.sojitz-soken.com/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)6871-2195 FAX:(03)6871-4945

E-mail: yoshizaki.tatsuhiko@sojitz.com